

# 村史に拾う

①

## 海老江村の「村御印」

村史編さん委員 宮本幸江

### ◆「村御印」を探そう!!

昨年の編さん委員会において「村御印」は江戸時代の舟橋村を象徴する古文書なので、村史にはその写真を載せたい。村内のどこかにあると思うので、探してください」とお願いしたところ、教育長の高野壽信さんが早速協力してくれました。右下がその「村御印」です。

高野さんによると、「子供の頃は公民館隣の熊野神社に掲げてあったような気がしていたが、村史編さんのために村内の神社を調査した時には、見あたらなかつた。不思議に思つていたが、公民館での会合のおり、ふと見上げた床の間の上部に掲げてあるのを見て、こちらに移されていたのだと思つた」とのことです。

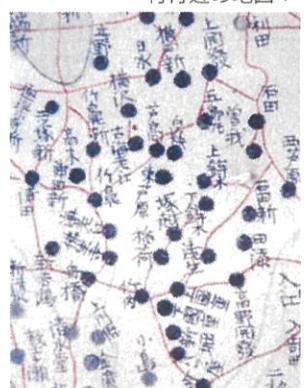
### ◆「村御印」とは?

「村御印」という言葉を「村」と「御印」に分けます。「村」は、現在の「舟橋村」の「村」とは内容が異なっています。江戸時代は、現在のほぼ大字にあたる区分を一つの村としていたので、現



◆海老江村の  
村御印

江戸時代の舟橋  
村付近の地図▼



「新川郡村々組分絵図  
(天保9年)」の一部

和三十八年  
発行の「舟橋村誌・第二編」には次の  
ように書かれています。

「村御印」は村では最も重要な文書で、村肝煎の交代や、毎年正月元日には袴を着用して村寄合の席上で読み上げて、礼拝したものである。山添いの村では、これを油紙に包んで肝煎家の仏壇前に吊り下げておき、いざ火事という時には先ず第一に、これを取り出せようにしてあつた。

### ◆「村御印」に書いてあること

一行目には「越中新川郡海老江村物成之事」、七行目には「同村小物成之事」と書いてあります。「物成」とは年貢米のこと、また「小物成」とは、年貢米以外の諸税のことです。つまり、村御印は租税徵収令状、現代の納税通知書にあたる文書です。

以上をまとめると、「村御印」とは印判状という意味になります。江戸時代の加賀藩の村に宛てた藩主の御印は、海老江村だけでなく加賀藩・富山藩すべての村に届けられました。ですから、探せば他の村のものも、どこかに保存されているかもしれません。

宮本幸江（みやもと・ゆきえ）  
元富山県史編さん室嘱託として県史  
近世編の調査・編集に従事。近世担当。  
富山市婦中町在住。

ません。何  
しろ殿様か  
らの文書な  
ので江戸時  
代は大切に  
扱われてい  
ました。昭

に対する課税)が一〇日(匂)でした。

### ◆「村御印」からわかること

寛文十年(一六七〇)ごろの海老江村は、二二六石の米がとれる水田が広がる農村だったこと、当時林野だった高原野への入会権を持ち、耕作のために必要な刈敷や秋を採取していたこと、その他にもう一つ、江戸時代を理解する上で基本的なことがこの村御印からわかります。それは最後の一項「海老江村百姓中」という部分に注目することで見えてきます。

今日の納稅通知書は個人に宛てて送付されます。所得税も消費税も納稅の義務があるのは個人です。それに対して村御印の宛先は全て「○○村百姓中」となつております。それには、年貢・諸役は村の百姓全員で責任をもつて納めるように命じています。

これを村請制といい、江戸時代は納稅も法令遵守も新田開発も村を単位として請負うことが基本でした。個人よりも村が優先される社会だったわけですが、ここが現代と大きく異なるところです。しかしこういう事が江戸時代約二六〇年間続いたわけですから、明治維新によって社会のしくみが変わった後も村優先の考え方は人々によつて受け継がれ、私たちの意識の底に根強く残つたと考えなければなりません。

# 村史に拾う

(2)

## 末三ヶ野の

### 開拓とばんどり騒動

村史編さん委員 浦田正吉

#### 加賀藩への不満と不信

安政五年（一八五八年）の大震災の復旧工事において、加賀藩は高原野（旧下段・高野・大森村）や末三ヶ野（旧釜ヶ淵村）を收用して、新田開発を押し進めて劇甚災害地域の村々を同地に引越させ、「引越何々村」という村々が同地に沢山誕生した。これを機会に、藩は残りの土地の本格的開発を進めそのため舟橋村地域を含む「郷方二十一ヶ村」と言われた高原野と末三ヶ野の北方に存在し、「野役銀」という税を納め、入会権（燃料や肥料の草刈り場、建築資材の補給地としていた権利）を持つていた村々は藩の補償額が不十分だと考え、藩に対する不信と不満をつのらせていた（後述のばんどり騒動の遠因、背景）。

#### 三ヶ屋作兵衛の義侠

末三ヶ野（二二〇餘強。うち三五ヶ弱

弱が引越村分となつた）は米道・末谷口・上末三ヶ村の入会地であつた。この三ヶ村への補償額は元の面積の二割

藩は三ヶ屋へのこのよだれ元レベ  
ルだけで了解された広大な土地売買を  
認知する訳にはいかなかつた。慶應三

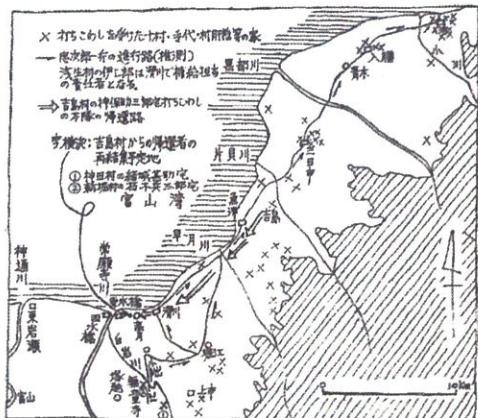
#### 三ヶ屋の敗訴

年十一月、吉島村（現魚津市）の御扶持人十村並の神保助三郎をはじめ関係の十村ら九人を召喚して金沢の公事場で四日三晩連続の審理がなされた。神保らはそれにいたつた諸事情を述べ、当局はやむを得ない売買のあつた「事実」を承認した。明治二年（一八六九年）六月、藩は米道村など三ヶ村に、

に当たる四五ヶで、あつた）。しかしすでに魚津

作兵衛に三ヶ屋の酒造家

#### ばんどり騒動の概念図



付した用水復旧費をねん出するために出却していた。三ヶ屋は魚津の町人で二七八両で買つた。当時、三ヶ村の窮状をすくう義侠的行為として評判となつた。新川郡の十村等はこれを黙認した。新川奉行所の実務担当者の足輕たちも「了解済」のことであった。ところが藩は米道村の元肝煎の太兵衛を中心し、新川奉行所の役人もその線で一揆指導部を付けとして文久三年（一八六三年）九月に引越分等をのぞいた一六〇餘弱の新開を開拓する従来の政策を根本的に変えて新田開拓に力点を置いたからだつた。

三ヶ屋は、表の顔として酒造家・鉱山経営者・土木請負業者・黒薙温泉経営主として多角経営をし、裏の顔としては暗黒界のボスで魚津町のみならず新川郡の地域社会に隠然たる影響力をもち、藩の重役との強いコネで勝訴を確信して訴訟を起した。しかし、有力な後ろ盾は失脚し、彼は敗訴した。そのため、三ヶ屋の配下で末三ヶ野への入植を当て込んでいた連中（その代表が塚越村の忠次郎、宗三郎、与三兵衛）は、十村たちが土壇場で三ヶ屋を切り捨てて保身にはしつたと考えた。彼ら

は新川郡の十村らに対する「黒社会」

特有の復讐、つまり神保ら新川郡の十村の大更迭をめざして、一揆を企んだ。それが竹内村の無量寺で決起し神

裁判所）に訴訟をおこした。

忠次郎ら一揆の主謀者は、④をひたかくし、明治二年の不作に対する減免などの①だつたという「態度」を擬態していた。①は新川郡に先行して激しく他郡でも行われており、藩は八月から十月にかけて納税方法の改革を布告して農民たちを慰撫していた。新川郡の行動も一部「暴走」はあつたが、他郡と同じ單なる①であると主張した。穩便に事を終息し、責任を回避したい新川郡治局の役人もその線で一揆指導部を内々に指導し、十一月六日付け「上新川郡小百姓惣代四人」の名での十六項目の嘆願文の藩への提出となり、事態は急速に鎮静化した。三ヶ屋作兵衛は牢死し、忠次郎は明治四年十月二十七日、金沢で斬刑に処せられ、二万人が参加したといわれた新川郡の大騒動は「一件落着」したのであつた。やがて三ヶ屋作兵衛は忘却され、「郷騒主」忠次郎は「義民」として伝説化されていった。

保家の打ちこわしとなつた明治二年十月下旬から十一月初旬にかけての「ばんどり騒動」の真相であつた。

加賀藩は内偵によつて、①嘆願陳情運動や②火事場泥棒的に一揆に便乗した騒動③忠次郎逮捕後の下新川での不穏な動きと、④三ヶ屋が背後に在つて新川郡の十村等の大更迭を目的としていた「主力となつた動き」とを弁別していだ。

浦田正吉（うらた・しょうきち）  
元富山県史編さん班主任として近代編の調査・編集に従事。近代担当。  
滑川市在住。

# 村史に拾う ③

## 中世の立山下での年貢収納

村史編さん委員 久保尚文

### ◆年貢の取り立て

『万葉集』にある山上憶良の「貧窮問答歌」は、税の取り立てを嘆く歌です。一単位が五十戸ほどの家々を訪れ、税を徴収する里長は鬼のようで、民衆は泣きの涙で納税しました。

古代律令政府の物納と労役の両種の課税は重く、民衆は時に抵抗しました。やがて中世の武家の世には一揆などが頻発したようにいわれます。だがそぐった史料は余り残っていません。農民らの抵抗は逃散が主だったでしょう。

租は田の面積に応じた税です。神への収穫物奉納だった初穂儀礼が共同体首長への貢納に転じ、当初は地方税でした。しかし次第に税率を高めつつ国税化し、中世莊園制下で、領主に土産・特産物を奉る年貢が主税となつたのです。年貢という用語の初見は後三条天皇期の延久三年（一〇七二）六月二十四日

の太政官符です。先に発した延久の莊園整理令と共に國家財源確保の税制改革であり、生産物の国税化策でした。

後三条の子の白河法皇は院政を始め、

姻戚の清華家グループを摂関家への対抗勢力として育み、越中等の知行国主

とし、地方国務を私物化させつつ家領莊園を経営させ、年貢徴収効率を高めさせ、収益を公家の職務として国政運営費に充てさせました。その代表が閑院流藤原氏の三条・徳大寺・西園寺の三兄弟家です。徳大寺家は砺波郡に般若野荘を開き、三条家は白岩川流域を高野荘として、以後室町時代まで君臨したのです。

### ◆立山神領針原の稻の段収

白岩川流域の寺田は、雄山神に奉仕した岩崎寺所在の立山寺の領地でした。また岩崎寺雄山神社が伝えていた明応元年（一四九二）の年貢簿冊「立山寺御神領針原公文給帳」が示すように、富山市針原は神領地でした。由緒ある立山寺は南北朝争乱で足利將軍方に討たれましたが、人々は寺名義で雄山神に祀りましたが、人々は寺名義で雄山神に祀ります。中世担当（富山県舟橋村中世地域の基礎的考察（前編））を村史中

年貢は土地生産物税だから、土地丈量基準の変更が年貢表記に影響します。古代は耕地面積を束や刈という生産高

単位で表示し、稻二〇把一束、その収穫面積一刈でした。室町時代は一〇〇

刈一一段でした。次第に廃れます、立山の麓では長らく使われていたのです。

当時の常願寺川は向新庄の東で湾曲して白岩川に合流していました。針原

地内も水害などで砂入り地があるなど、田に善し悪しがあり、収量が違いました。針原公文給帳は田地毎に「百刈

三俵二斗」「貳百刈 八俵」等と記し、

田の生産力を俵という単位で表しています。稲わらを編んだ俵を枠で計った米を入れる定量容器としたのです。先記換算で前者は段収三俵二斗、後者は三俵二斗、「貳百俵 八俵」等と記し、

田の生産力を俵という単位で表しています。稲わらを編んだ俵を枠で計った米を入れる定量容器としたのです。先記換算で前者は段収三俵二斗、後者は三俵二斗、「貳百俵 八俵」等と記し、

先の面積の刈表示もそうでしたが、立山神領地では戦国時代になつても古代以来の基準を堅持していたといえます。それは針原公文給の地だけでなく、近隣の舟橋村も同様だったでしょう。

しかし地域社会の雄山神への帰属状況は、争乱などで消えて今は不明確です。

天正一六年、佐々成政を切腹させた秀吉は新川郡を蔵入地とし、前田利家に預けました。だが利家は太閤検地の四斗俵を用ひず、立山神領と同じ五斗俵を使い、以後の加賀藩も踏襲しました。また五斗俵年貢の収納のため、若者組は日頃から盤持を競い、鍛錬していた

### ◆五斗俵の使用

中世の俵の実物はありません。日本史教科書にある「俵一俵四斗六〇kg」という基準は豊臣秀吉の太閤検地以後のことです。それ以前の白岩川流域では何斗入りの俵が使われたのでしょうか。そこで公文給帳の数字を検討してみます。

これまでの穀稻収納のマニュアル記載書は平安前期の『延喜式』です。田を上田・中田・下田・下々田に区分し、基準

の中田収量は一段一石です。六〇〇年

後、農業技術が進んだ太閤検地の時に公文給帳の段収四俵地の収量

はそれ以下のはずです。だが一俵四斗で計算すると一段一石六斗となり、基準を大きく越えてしまった不適格です。

そこで他の俵の事例を探すと、古代の本簡史料に五斗俵の例があります。他に半分の一俵二斗五升例もあって、それで計算すると四俵で一石となります。『延喜式』の中田と同じ一段一石の収量です。針原公文給帳はこの一俵二斗五升基準で書かれたに違いません。ただそれは計算上であり、実際は五斗俵を用いて収納したと考えられます。

先の面積の刈表示もそうでしたが、立山神領地では戦国時代になつても古代以来の基準を堅持していたといえます。それは針原公文給の地だけでなく、近隣の舟橋村も同様だったでしょう。

しかし地域社会の雄山神への帰属状況は、争乱などで消えて今は不明確です。

天正一六年、佐々成政を切腹させた秀吉は新川郡を蔵入地とし、前田利家に預けました。だが利家は太閤検地の四斗俵を用ひず、立山神領と同じ五斗俵を使い、以後の加賀藩も踏襲しました。また五斗俵年貢の収納のため、若者組は日頃から盤持を競い、鍛錬していた

久保尚文（くぼ・なおふみ）

中世担当（富山県舟橋村中世地域の基礎的考察（前編））を村史中世の準備作業として刊行。

富山市堀川町在住。

# 村史に拾う

(4)

## 白岩川流域の

### 最初の古墳として

初頭のころに築造されたと見てよい。

## 竹内天神堂古墳の

### 概要と築造の意義

村史編さん委員

藤田富士夫

### 竹内天神堂古墳の概要

舟橋駅前の竹内交差点の脇に「竹内天神堂古墳」がある。神明社の境内地がそれである。社殿は杉の大木に囲まれた高さ五メートルほどの高まりに乗っている。この高まりは、古墳時代に君臨した一人の王者のために築かれたものである。規模から推測すれば、全長が三八・四メートルを成す前方後方墳とすることができる。高さが一メートルほどの前方部と、高さが四・五メートルで社殿が乗る後方部とから成る。昭和六三年に行われた試掘調査で、東角に幅四五メートル、深さ一・七メートルの周濠が検出された。

本墳では、前方部と後方部の間の「くびれ部」が後世の整地を受けていてはつきりしないが、類似の古墳を参考にして大胆に復元すれば、本来は図1のような形をしていたと思われる（後日若干の修正有り）。このような形をした前方後方墳は三世紀後半（四世紀）

古墳（後世に方形に整えられた）、塚越古墳、稚兒塚古墳といったように直径が三〇・四〇メートル級の大型円墳が築かれている。それは四世紀中頃（五世紀前葉に築かれたらしい）。白岩川の流域に築かれているので、これらは「白岩川流域古墳群」と呼ばれている。それらは図2のように竹内天神堂古墳を中心として半径二キロメートル圏内に築かれている。富山県内において平野部に大型古墳が集中するのは当古墳に発し、稚兒塚古墳（五世紀初頭）をもつて終焉を迎えたと言えそうだ。竹内天神堂古墳は、白岩川流域の古代勢力の成立史を飾る最初の古墳として重要な意義をもつている。

舟橋駅前の竹内交差点の脇に「竹内天神堂古墳」がある。神明社の境内地がそれである。社殿は杉の大木に囲まれた高さ五メートルほどの高まりに乗っている。この高まりは、古墳時代に君臨した一人の王者のために築かれたものである。規模から推測すれば、全長が三八・四メートルを成す前方後方墳とすることができる。高さが一メートルほどの前方部と、高さが四・五メートルで社殿が乗る後方部とから成る。昭和六三年に行われた試掘調査で、東角に幅四五メートル、深さ一・七メートルの周濠が検出された。

前方後方墳は、東海地域から日本海沿岸地域の特徴的な古墳として最初に現われる。古墳の形や大きさは、それぞの豪族（王者）の力関係や系譜などで決まっていたらしい。富山県内にもいくつかの前方後方墳が築かれているが、とりわけ竹内天神堂古墳はその建築規格において、能登（中能登町）の雨の宮1号墳や越後（新潟市）の山

谷古墳と系譜を同じくしている。つまり竹内天神堂古墳は能登から越後平野の日本海に及ぶ前方後方墳体制で結ばれた広域連合の一員とし重要な役割を担っていたと言えそうである。

### 被葬者について

昭和三年に刊行された『舟橋村誌』（舟橋村役場刊）は、景行天皇二八年に当地を巡察しにやつてきた武内宿祢、その人の三男・藤津の古墳と想定している。藤津は当地を開拓した祖とされている。もととこの伝承は江戸時代中ごろに富山藩主の野崎伝助が書いた『喚起泉達録』に依つて、舟橋村の地名などを基に創作されているようだ。

藤津説に関しては、年代が合わなかつたり、伝承の由来の根拠が不明であつたりする。つまり、被葬者についてはまったく分からぬのが実際である。

藤津説に関しては、年代が合わなかつたり、伝承の由来の根拠が不明であつたりする。つまり、被葬者についてはまったく分からぬのが実際である。

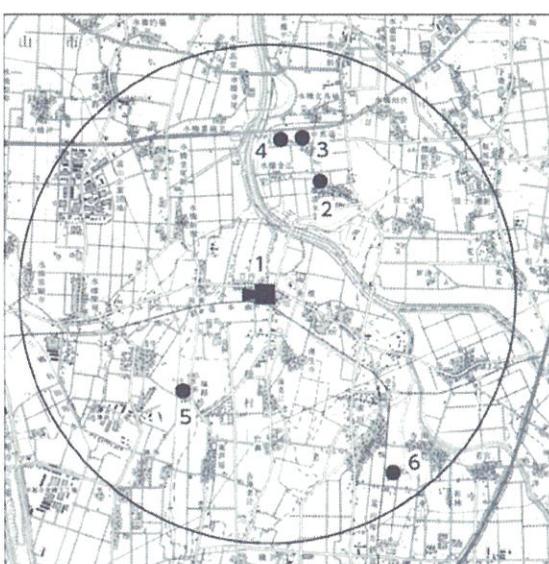


図2 白岩川流域古墳群—竹内天神堂古墳と周辺の古墳—  
1. 竹内天神堂古墳 2. 清水堂大塚古墳 3. 若王子塚古墳  
4. 宮塚古墳 5. 塚越古墳 6. 稚兒塚古墳

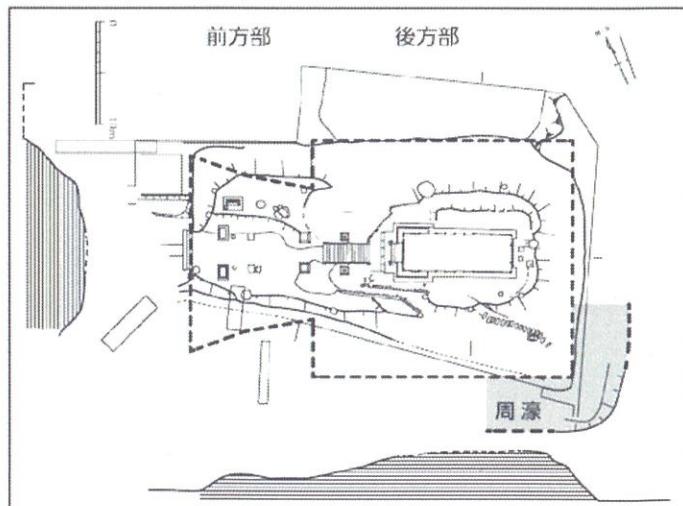


図1 竹内天神堂古墳

藤田富士夫（ふじた・ふじお）  
前富山市埋蔵文化財セ  
ンター所長（婦中町史）  
や『細入村史』、『新上市  
町誌』等の先史・考古編  
の執筆を担当。  
上市町在住。

# 村史に拾う

(5)

## 人々の信仰生活

村史編さん委員 高谷純夫

### ◆「お東」「お西」

村内で聞き取り調査をしていたとき、何度も質問されたのが、「舟橋村にはお東の寺しかないのはなぜ?」「お東とお西はどう違うの?」であつた。

確かに舟橋村の寺院は6ヶ寺。そのうち浄土真宗の「お東」(正式には真宗大谷派・東本願寺)の寺院が5ヶ寺(内1ヶ寺は平成16年廃寺)、浄土宗が1ヶ寺である。

昭和3年の『舟橋村誌』には地区別宗派戸数が掲載されている。全戸数209、お東102、お西(正式には浄土真宗本願寺派・西本願寺)82、曹洞宗7、浄土宗9、日蓮宗8、真言宗1である。209戸の内184戸が浄土真宗でその割合は88.0%、富山県全体では約70%が淨土真宗で「真宗王国」といわれる所以である。(東・西の割合はほぼ

(半々)

さて、「お東」「お西」である。今、NHKの大河ドラマで「軍師官兵衛」を放送しているが、その中に織田信長と戦った本願寺11代の顯如上人が

出てくる(石山合戦)。信長との和議が成立した後、本願寺は豊臣秀吉から京都七条堀川の土地を寄進され、本願寺が再興された。しばらくして、顯如上人が亡くなられ、長男の教如上人が繼承したが、母である如春尼(じゆんに)が三男の准如上人の繼承を秀吉に訴え、教如上人は隠居。1602年、

土地を与えられ、新しい本願寺が成立。これ以後、東本願寺(教如)と西本願寺(准如)に分かれ、現在に至っている。全国各地の真宗寺院も東西に分かれ、同じ寺号で東西に分かれた寺院もある。

連々講は、現在も一部の地区で行なわれているが、その数は少ない。

今回の調査で、昭和28年の巡回記録が見つかった。2月4日の沢端地区(立山町)に始まり、4月3日の安藏寺地区(現富山市・旧大山町)まで、139地区を巡回している。現在廃村や無住になつている地区も多くあり、確かに人々が住み、信仰生活を送っていたことを示す貴重な資料といえる。詳しくは村史に掲載えない。

### ◆連々講(通称「ご書きはん」)

竹内の無量寺には、東本願寺20代

目達如上人(1790~1865)の「ご消息(手紙)」がある。ご消息は、道具・巡回帳などが入った黒い塗りの箱に収められていて。毎年2月から4月まで、現在の舟橋村、立山町、上市町、滑川市、富山市の各地区を巡回していた。宛名が「新川郡四十九ヶ寺二十二日小寄講中へ」とあり、当初は49ヶ寺の寺院が関係していた。「講」は浄土真宗の大事な集会で、お互いが信心を語り合うとともに、親睦を深めるものであつた。本願寺8代目の蓮如上人が、わかりやすく信仰内容を人々に知らせるために、多くの「御文(手紙)」を書いたことに始まる。



親鸞聖人像(海老江等通寺蔵)  
(寄木造玉眼入櫻材 江戸中期)

### ●役場資料

役場の収蔵庫には、神社・寺院に関係する資料として、「神社明細帳」(明治12年の書き上げをもとに加筆・訂正あり)、「神職、氏子(崇敬者)総代、氏子(崇敬者)名簿」(一部の神社の名簿で、昭和2年の日付あたり、「氏子総代届綴」(大正6年)、「寺院臺帳」(昭和17年)、「宗教法人届」(昭和27年))が残つていて。これらの資料を活用しつつ、舟橋村の人々の信仰生活を明らかにできればと考えている。

高谷純夫(たかたにすみお)

元高岡南高校長。等通寺住職。「婦中町史」執筆。神社と寺院を担当。舟橋村在住。

# 村史に拾う

(6)

## 戦中・戦後の舟橋村

—こんな時代があつたんだ—

村史編さん委員長 須山盛彰

### 来年は戦後70年

日本が太平洋戦争に敗れてから来年で70年を迎える。その頃の舟橋村はどうな状況であつたろうか？外観は現在以上に純朴な農村だった。しかし、日本中がそうであつたが、戦争下の舟橋村は軍事色一色に塗られていた。敗戦を中心とした戦前・戦後を見てみよう。

昭和十六年十二月八日、太平洋戦争開戦。緒戦は戦勝に湧いて、舟橋村でも旗行列をするほどの騒ぎとなつたが、その後戦況が悪化した。十七年六月のミッドウェイ海戦に敗れたのち、各地で撤退を余儀なくされた。村では連日、出征兵士の歓送式が行われて、一家の働き手や若者たちが次々に戦場へ送られて行つた。

一方、村での生活は（銃後といわれた）、統制経済のもとで自由に物が買えず切符制で常会を通じて配給された。また、資源の不足から金属回収が行わ

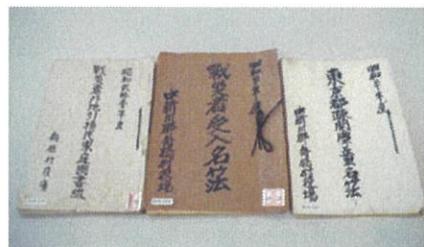
### 縁故疎開と 集団疎開の子どもたち

出征兵士が村を出る一方、都会から疎開の人びとがやってきた。政府は初め、「撤退」を意味する人員疎開には積極的でなかつたが、本土空襲が必至の情勢となつては止むを得なかつた。

昭和十九年三月に閣議決定された「一般疎開実施要綱」では、大都市における人員疎開の方針が示され、老齢者や幼児・学童の縁故疎開の実施が打ち出された。

舟橋村の各家では親戚などの疎開の人たちを受け入れた。舟橋国民学校でも昭和十九年八月から縁故疎開児童の輸入があり、東京・大阪・静岡・富山などからやってきて村で学ぶようになら

れ、学校の校庭にあつた二宮金次郎の銅像や各家庭の鍋釜、各寺院の梵鐘も供出させられた。また、農家の屋敷林のスギ、ヒノキ、ケヤキなどの立木も軍用船建造のために伐木、供出された。



「舟橋村役場文書」歴史を語る貴重な資料

東京が大被害を受けたので、根こそぎ疎開と言われる第二次学童集団疎開が行われた。このとき、舟橋村へは東京都荏原区（現品川区）の源氏前国民学校の児童が竹内の無量寺に疎開し、舟橋国民学校へ通学した。第一学年から六年まで四十八名の児童が八人の付添いと共に、本堂で寝起きし、およそ半年を過ごした。

### 戦災者・引揚者で村人口は急増

昭和二十年八月二日未明、米軍機が富山市上空へ来襲し、約二時間にわたって市街地を焼き尽くした。夜明けとともに罹災者が当村まで逃れ来て、親戚・知人宅に身を寄せた。舟橋村役場

では、八月二日から戦災者受入事務を開始し、食糧配給などの便宜をはから

った。役場に残された「戦災者受入名簿」には、三四三世帯、一四六名の名が記されている。

昭和二十年八月十五日、村民はいわゆる「玉音放送」によつて戦争が終結したことを知つた。終戦により軍隊の解散・復員、外地からの引揚げが始ま

り、村人口の急増期を迎えた。昭和十九年的人口は、出征や動員の関係もあって男性人口が減り、総人口は一、一人であつた。二十年には男女とも急激に増え、二十一年も引き続き増加して一、七五九人とピークを記録し、

つた。ただ、縁故疎開は一般的の転入と区別がつかず統計にも表れていないが、二十人前後だたと思われる。

昭和二十年三月以降、東京大空襲で東京が大被害を受けたので、根こそぎ疎開と言われる第二次学童集団疎開が行われた。このとき、舟橋村へは東京都荏原区（現品川区）の源氏前国民学校の児童が竹内の無量寺に疎開し、舟橋国民学校へ通学した。第一学年から六年まで四十八名の児童が八人の付添いと共に、本堂で寝起きし、およそ半年を過ごした。

昭和二十年八月、農地委員会事務局を設置し、農地の買収・売渡しの作業を進めた。二十六年三月までにすべての作業を終わり、全農地の一町歩を超える小作地の全てを政府が強制買収し、小作人に売り渡し自作農を創設しようとするものであった。

農地改革の骨子は、不在地主が所有する小作地全部と在村地主の所有する一町歩を超える小作地の全てを政府が強制買収し、小作人に売り渡し自作農を創設しようとするものであった。

「軍国主義」から「民主主義」へ、戦後政治の方向転換は、多くの大改革を伴つた。村民生活に直接大きな影響を与えたのが、標記の改革である。

昭和二十年以降は、一、四〇〇人台で推移した。

### 農地改革と教育改革の波紋

二十二年以降は、一、四〇〇人台で推移した。

須山盛彰（すやまもりあき）

元富山東高等学校長。元富山県史編さん委員として現代編の調査、執筆に関わる。「新上市町誌」（統下村史）を監修。富山市在住。

# 村史に拾う

(7)

どうして人口が増えたのか？

## ー市街化調整区域除外の取組みー

村史編さん委員 藤谷 寿美夫

舟橋村の人口は、最近の二十年間で倍増し、人口増加率が北信越五県の町村で一位となっています。（平成二十二年国勢調査）。これは言うまでもなく、新しい住宅団地が造成されたためですが、それに至る物語りがあります。

### 人口が減る！

昭和四十年代以降、舟橋村の人口は一、四〇〇人前後で推移していましたが、昭和五十五年に年間の出生者数（生まれた子供の数）は八人となり、若年人口の減少がはつきりとできました。同時に村の高齢化率も上昇し、少子高齢化の際立つた地域になってしましました。昭和六十二年には舟橋小学校への入学者は六名となり、全校児童も九五名と大きく減少しました。（平成元年には九九名）一学年に一学級を保つことも難しくなり、今後の村の発展・活性化が危ぶまれたのです。

抑制する地域」を「市街化調整区域」としています。この「市街化調整区域」に指定されると、この区域での開発行

程に拡大するのを防ぐための法律です。都市が無秩序に拡大していくことをストップロール化といいます。つまり、劣悪な市街地が形成されてしまうことが大きな問題となっていました。都市計画法は、都市を「積極的に市街化を図る区域」と「強力に市街化を抑制する区域」と区分し、このスポーツル化を防ごうとするものです。この「積極的に市街化を図る区域」を「市街化区域」といって、「強力に市街化を

### 「市街化調整区域」という壁

なぜ、舟橋村の人口が増えないのか。

それには、法的な規制が大きな壁となっていたのです。昭和四十三年に国が制定した「都市計画法」は都市が無秩序に拡大するのを防ぐための法律です。

都市が無秩序に拡大していくことをストップロール化といいます。こうなると、

なぜ、舟橋村の人口が増えないのか。

それは、法的な規制が大きな壁となっていたのです。昭和四十三年に国が

制定した「都市計画法」は都市が無秩序に拡大するのを防ぐための法律です。

都市が無秩序に拡大していくことをストップロール化といいます。こうなると、

なぜ、舟橋村の人口が増えないのか。

それは、法的な規制が大きな壁となっていたのです。昭和四十三年に国が

制定した「都市計画法」は都市が無秩序に拡大するのを防ぐための法律です。

都市が無秩序に拡大していくことをストップロール化といいます。こうなると、

なぜ、舟橋村の人口が増えないのか。

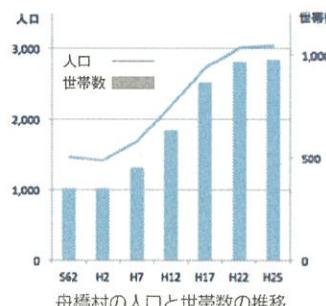
それは、法的な規制が大きな壁となっていたのです。昭和四十三年に国が

### 全国初の「調整区域」見直し

藤谷寿美夫（ふじたにすみお）

昭和五十六年に村長に就任した松田秀雄氏は、村長自らが国や県へ何度も

現在、富山県立吳羽高校勤務、日本史を担当。富山県近代史研究会に所属。「國重ものがたり」、「養照寺史」の編纂、「富山県、謎解き散歩」の編纂にも関わる。舟橋村在住。



平成元年に宅地造成された東芦原団地

足を運び村の現状を訴えます。粘り強い陳情が実つて、ついに昭和六十三年九月「富山・高岡広域都市計画地域」から除外され、隣接する立山町とともに「立山舟橋都市計画区域」に入ることになりました。これによつて厳しい開発規制は無くなり、住宅団地や工業団地の誘致が可能になったのです。全国でも市街化調整区域からの除外はこれが初めてのことと、当時の新聞記事にも「悲願が実り!」の見出しで紹介されました。

その後、村では環境を損なわないよう配慮した形での住宅団地の造成を進めます。平成元年の東芦原団地を始めに、平成二十五年にかけて五三五戸の宅地が開発され、村の人口も二、〇〇〇人を超えて倍増しました。平成二十二年国勢調査では、人口増加率が北信越五県の市町村で一位となり、全国が「市街化調整区域」になり、開発を進めることができなくなつたのです。

しかし、人口増加の対策としては、

適正な規模の住宅団地を造成し、若いファミリー層を村に呼び込むことしかありません。舟橋村は富山市に隣接し、富山地方鉄道の越中舟橋駅もあり、地価も安く、富山市のベッドタウンとしての発展も期待できたからです。

（詳しくは村史現代編にて）

現在、富山県立吳羽高校勤務、日本史を担当。富山県近代史研究会に所属。「國重ものがたり」、「養照寺史」の編纂、「富山県、謎解き散歩」の編纂にも関わる。舟橋村在住。

# 村史に拾う⑧

『八月一日、天まで焼けた』

著者 中山伊佐男氏との会見記

村史編さん委員 前田 稔



「戦災者受入簿」に記されている自分の名に見入る中山氏

兄姉妹」とあるから、叔母さんがお嫁さんで遠い親戚にあたる。もつとも中山氏のご両親は富山の人なので親戚が舟橋村にあっても不思議ではない。さて明和俊一さん宅に入つて暫くして、ご当人の中山氏、奥様、そして同行カメラマンの三名がやつて来た。家中では当主の俊一夫妻、本家の玄三さん、我々三人が待ち受けていた。挨拶後、中山氏は仏壇に手を合わせられた。

## 止どまらない話が続き…

自身としても中山氏が空襲時居られた富山市泉町にほど近く過ごした者であり（現在東町三丁目）、奥田用水脇は柳町保育園、柳町小学校への通学路であった縁もあり、時代は違うが近所の住民で、氏がそのまま富山に居たなら同じ景色を見ていたと思うと何だか近しい人に思えました。

帰宅後、本を読み返し又語られた内容

## 何か面白い事の始まり

一昨年十月四日(金)、いつものように村史編纂室に出勤すると既に須山編纂委員長が業務を始めておられた。挨拶を交わし編纂の仕事を始めていたら、須山先生が「何か面白い事になってきた」と言われる。何事かと話を聞くと、富山大空襲体験記である「八月一日、天まで焼けた」の著者、中山伊佐男さんがどうも舟橋村に一時疎開しており、今日疎開先であつた明和家に来られ高野教育長と会いに行くとの事であった。



中山夫妻を囲んで (明和俊一宅にて)

須山先生は村史の中でも戦中戦後部分の執筆担当であつた事から、舟橋村文書の「戦災者受入名簿」や「戦災者返還物資配給台帳」などを既に読

「八月一日、天まで焼けた」の著者と確信

りたいと思った。

昼帰宅し、書棚にあった本を拾い読みみると、「九五頁目に、舟橋村で」との項が立たれており、ようやく間違いない事が判明した。午後二時役場を出、海老江の明和家を訪れる。この明和家は俊一さん宅、北隣の立派な門がある明和玄三さん宅は本家で、ここへは一昨年末大雪の日に村史取材で訪れていたお宅である。中山氏は明和家の親戚であり、本にも「ぼくの父の從

事となり、疎開当時の村の様子を聞き取りたいと思った。

須山先生から舟橋村文書のコピーが手渡され、現物もお見せする。中山氏は初めての事で感じ入った様子が見受けられた。そして言われる「これは大変貴重なもので、文化財と言つても良いものだ」と。確かに当時の様子を伝える又と無い記録で、歴史の一部を伝える文化財に間違いないだろう。そこに記入されている

前田 稔 (まえだみのる)  
現在、舟橋村社会教育委員、図書館協議会委員、民生委員。現代史担当

## 不思議な縁が

こうして見ると中山氏と私は、富山市、舟橋村という共通項を持ち、母親も同じ場所で空襲体験している不思議な縁を感じた。二時間弱の会見は瞬く間に過ぎ、帰り際中山氏から「八月二日、天まで焼けた」を舟橋村図書館へ譲呈して頂いた。いつか機会があれば再び舟橋へ来て頂き、又お話を伺いたいものである。

ご本人がこうしてその記録を見、その史実が目の前で繰り広げられる現実に又感動してしまう。

# 村史に拾う ⑨

## 舟橋村の人々の活動の場（大地）

村史編さん委員 菊川 茂

### 舟橋村の大地

舟橋村の大地は、西側を流れる暴れ川として知られる常願寺川や東側を流れる白岩川などが土砂を運搬し、この地で堆積して形造られた扇形の地形「扇状地」から出来ています。

より、子細に言えば、富山市上滝か

ら下流に向けて扇形に広がる地形の扇状地、この末端部である「扇端」が丁度、舟橋村の主な大地となっています。

上滝の標高が約165メートル、これから北の方向、富山湾に向かって高度を下げてゆき、舟橋村と富山市水橋地区の境界部が標高約10メートルで、扇端となっています。

扇状地は上流部を扇頂部、中央部が扇尖部、下流部が扇端部と区分されます。更に扇状地の末端、下流へ続くのが「自然堤防帶」で、舟橋村でも下流部は自然堤防帶となっています。舟橋村付近で自然堤防帶に幾筋かのかつての河川の跡「旧河道」がみられます。

舟橋村の大地は、西側を流れる暴れ川として知られる常願寺川や東側を流れる白岩川などが土砂を運搬し、この地で堆積して形造られた扇形の地形「扇状地」から出来ています。



遠く離れた「立山カルデラ」で生まれた土砂が常願寺川で運ばれ舟橋村の大地を造っています。

### 自然災害

近年、豪雨、地震、火山噴火などが引き金となって、土砂災害など日本有数の大型の扇状地の末端部であり、さらに下流に向かって「自然堤防帶」も形造られています。

寺川によつて運ばれた土砂が堆積した

寺川によつて運ばれた土砂が堆積した日本有数の大型の扇状地の末端部であり、さらに下流に向かって「自然堤防帶」も形造られています。

菊川 茂（きくかわしげる）

NPO法人富山県自然保護協会理事長、富山県立山カルデラ砂防博物館専門学芸員、立山ルート緑化研究委員会会長、とやま環境財團理事  
『富山地学紀行』『立山の地形・地質』などの執筆

のため地盤は安定しているようにみえますが、地震の振動などには弱く、水や砂などが噴出することがあります。地下に埋め込まれていたマンホールが浮き上がり、地面が傾き頑丈に建てた建物が壊れず、そのまま傾き改修に新築以上の苦労をするなどの灾害、いわゆる「液状化」の発生が案じられています。

のことをよく知っているので効果的に救助が出来た為と考えられています。お互いに助け合う行動が取りやすく、「共助」がより効果的に發揮され、防災につながると考えられます。

村史編さん室から

### こんな情報ありますか？

- 個人の日記や農業日記などで公表可能なもの。特に昭和二十年八月の終戦の日前後に書かれたもの。
- 昭和二十年五月十七日に、地鉄三郷駅付近で発生した地鉄電車の衝突事件に関する情報をお聞かせください（新聞記事はあります）。
- 昭和二十年四月から十一月の間、舟橋村に置かれていたという「富山地方海軍人事部」という機関について何かご存知の方。

災害から身を守る防災では、国や市町村など公の取り組み「公助」、自分が自分を守る「自助」が大切です。さらに、

河川が運ぶ土砂はその粒径（直徑）で区分されています。  
2ミリメートル以上の土砂を「れき」、2ミリ～1／16ミリが「砂」、1／16ミリ以下の大きさのものを「泥」と大別されています。

上滝付近も舟橋村も、常願寺川が土砂を運搬し堆積した扇状地ですが、上流の上滝では主に大きな「れき」が堆積しています。下流の舟橋では、砂や泥が堆積しています。

扇端部では一般に地下水が豊富で、湧水地帯となっています。

扇状地の扇端部や自然堤防帶の堆積物には水分が多く含まれています。そ

### 助け合いで防災を

災害から身を守る防災では、国や市町村など公の取り組み「公助」、自分が自分を守る「自助」が大切です。さらに、

村史編さん室（役場2階）へご連絡ください。  
TEL 464-11121

# 村史に拾う

(10)

## 富山の食文化

村史編さん委員 塩原紘栄

### 地域性を伝える雑煮

新年を祝ったのはもう二ヶ月前、多くの村民は例年と変わらない雑煮をいただかれたと思います。古くからの行事と共に伝わった食べ物は地域独自の食習慣・食文化を伝えており、お雑煮はその代表です。

ところで、あなたが食べたお雑煮の餅の形は丸ですか、四角ですか？ 餅は煮ると焼く、どちらですか？

### 餅あれこれ

徴を伝え嫁の実家からブリ一本届ける歳暮の風習があるように富山の正月魚は勿論ブリです。

明治・大正の食生活を県ごとに記録する『聞き書 富山の食事』で富山地区を担当した時の調査地は三郷でした。そこは舟橋村の隣、常願寺川右岸、私の育った地は常願寺川左岸、どちらも魚は水橋から運ばれ雑煮の出しと具にすり身を使つていました。

さらに味付けは味噌と醤油どちらですか？ この3つの要素の組み合わせが地域の特徴となります。京都を代表とする西日本では丸餅を茹で白味噌で味付け、関東では角餅を焼いて、お清汁にします。あなたの雑煮が角餅を茹でた醤油味であれば西と東の食文化が混ざっている事になり、富山の食文化が地理的に東と西の文化が伝わる到達点・混合点であることを示す例です。そしてお雑煮に載せる具は、その地域の農水産物の特

センボのながまし（生菓子の転訛）をはじめ、チヨウハイ帰りの土産、二月正月、コリモチ、農作業の節目など折にふれて餅を搗き 餅好きは今も引き継がれ餅屋さんが多くあります。

### 家計費調査からわかる 富山の食

現在の私たちがどのような食品食物を購入しているかを調べると県の

特徴が分かり、国が行う家計費調査で「昆布の消費、日本一」（県庁所長都市での調査）がクローズアップされています。北前船で運ばれた昆布は名産品「昆布巻蒲鉾」を作りました。昆布〆さしみ、ご飯にとろろ昆布、切つてそのままおやつにと身边に賞味しており、とろろ昆布のおにぎりが有名になりました。

平成の初め、家計費調査を基にした新聞連載「とやまの食嗜好」の初回、県民の食生活の概況を解説した時、昆布、刺身盛り合わせ、いか、餅などが全国一位となり、穀類では米、肉より魚、酒では清酒が多く、外食が少ないなどの特徴がありました。年月が経ち中食・外食が増えたとはいえ、今も全国平均より地域の風土に根ざした伝統的な食生活をおくつていると思います。

### 郷土料理の伝承

全国食文化交流プラザ開催を機に

県内6か所で「食祭とやま」があり、食文化の展示発表を企画した時、これからも伝えたい郷土料理と作る人をセットにした「食の伝承人」を選定しました。舟橋村では「あいまぜ」に決まり伝承人さんは今も活動されています。他に、いとこ煮、べつこう、よごし、たら汁、昆布巻き、おせすし、つぼ煮、呉汁、ほたるいかの辛子酢味噌、ぶり大根などがあります。あなたがイメージできる物、食べた事のある物はどれでしょうか。



「あいまぜ」  
大根や白菜漬けを利用した粕汁

塩原紘栄 (しおはら つなえ)

富山短期大学名誉教授、富山県消費者協会会長、元舟橋村教育委員長。舟橋共編著書「くらし百年」(富山県)、日本農文協、「富山大百科事典」(北日本新聞社)、「トータルクッキング」(講談社)。

# 村史に拾う

(11)

## 日々新たなる発見

村史編さん室 林

伸 夫

村報ふなはし 第1号  
昭和31年6月1日発行

壳が上手い」と  
書いています。

もうひとつ、  
電話として「村  
」

視察旅行のこぼ  
れ話として「村  
」

月28日から4泊  
5日の日程で国  
会見学を兼ねて

視察旅行を行つ  
た。日光 中禅寺

湖では猛吹雪、雪国に育つた猛者連中も  
前夜車中の睡眠不足もあつたせいか、寒  
い寒いとブルブル振い上がつた。一中略

1日本テレビの階上（地上50m）から東  
京都街の眺望を満喫したが、中には膝か  
ら下をブルブル、鉄柵につかまつて僅か  
に巨体を支えている者もあつた。羽田飛  
行場で東京都上、10分の飛行料金千円也、  
内五百円は保険料で百万円の保険がついて  
いる。千円の料金を財布の底をたたき  
かねたのか、百万円の命のかけがえに躊  
躇したのか、その飛行には満場一致の議  
決が出来なかつた」と、乗らなかつた議  
員を皮肉る。本当にうまい表現がされて  
いるものだと感心したのは私だけかも知  
れませんが、そのセンスは今も受け継が  
れています。

**「村誌」か「村史」か**

私は、昨年4月より編纂室の事務職員として舟橋村史編纂に携わっています。舟橋村史は昭和3年に第一版、昭和38年に第二編が刊行されており、今回が50年振りの取り組みになります。

私は、舟橋村に生れ育ったので編纂委員の方々が執筆される際手助けができるのではないかと自負していました。ところが、それはとんでもないことだとすぐに気付かされました。知っているようでも知らないのが現実。今まで何気なく思っていた事柄を質問されると、「え？」と、それはちょっと調べてみないとわかりませんね」「どうだつたかな」と即答に躊躇する有様でした。舟橋村の辿ってきた人道、現在の舟橋村を形づくってきた人た

ちについて、残されている資料に基づき正確に伝えなければなりません。前2巻の村誌、広報（村報）、役場資料、新聞記事等々あらゆる物からヒントを見つける必要があります。お気付きの方もいらっしゃると思いますが、前2巻は「村史」でなく「村誌」となっています。ここにも理由があります。昭和4年の村会で質問されています。「中新川郡の町会

で町村史を発行しているのは東谷村（現立山町）のみで、東谷村は村誌としておられます。尚、舟橋村では県庁と相談した結果、村史より村誌にした方が良いとう事で村誌とした」と答弁がされています。調べてみないとわからないものです。

今回は明治22年に村が誕生してから126年もの長い歴史も含めて編纂するので、「村史」とすることに決まります。

### 「村報」から「広報」へ

今の広報のことですが、昭和31年6月に「村報」として創刊されました。当時の村長明和孝蔵氏は「出す以上は途中で止められない」という事で創刊に当たり迷いがあつたよう書かれています。その村報も昭和51年6月発行の第193号より「広報」として受け継がれてきて、今月号が第492号になります。ここにも歴史があります。ここで余談になりますが、昭和31年当時の村報の編集後記を読むと「本年は2年続きの豊作と新聞では言っているが、当村は昨年に比べて反り1俵から2俵減収。物価は上がる、米価は下がった。来春から配給米1斗に

### 記憶を記録に

さて、みんなさんは、舟橋村に地下鉄の電車が開通したのが昭和6年8月15日、富山までの運賃が18銭。県道富山・上市線に昭和52年5月末までバスが走っていたのを覚えていらっしゃいますか。また、

現在の舟橋小・中学校の建物が出来る前、現在の小学校の敷地に木造の校舎、その前は佛生寺と舟橋に跨る地点にあつたこ

とを「ご存じですか。学校、保育所他村内各施設、道路、村内で発生した災害等々、それぞれに歴史があります。編纂委員の方々から質問される度、次から次へと新たな発見に出会うことが出来ます。意外に「ズキこんどのつもり」とか、「はやそんなに経つけ」と日ごろ目にするもののがいつからとか、どんな経緯でそうなったのかなど思わないものです。いろんな方に興味を持つて調べてみることは、舟橋村をより身近に感じさせてくれます。そんなこんなで調べている内にもつと知りたい、舟橋村の事を村民のみなさんはもちろん、全国の人たちにも知つてもらいたいという気持ちになつてきます。ところが、明治22年町村制が実施されながら舟橋村として堅持している当村に興味を持つていておられ、村史を編纂中であることもご存じで、他県や近隣の方々から情報提供の電話をいただきました。舟橋村のホームページをご覧になつてのことだと思います。「日本一ちっちゃな舟橋村」だけど、地道にこつこつやってる姿をちゃんと見ていてる人がいます。編纂委員の方々により正確な資料提供を中心掛けていますが、若輩者でまだ知らないこと、わからない事がたくさんあります。昔の話、大歓迎です。是非、みなさんの記憶、記録を提供してください。

村史は「舟橋村の過去を知り、未来を創造する」と言つたら大袈裟かも知れませんが、村史刊行の折には、歩みを一步戻して舟橋村の足跡を辿つてみられてはいかがでしょうか。

林 伸夫（はやしのぶお）

編纂室 事務職員 舟橋村海老江在住

# 村史に拾う

(12)

## 村史に思う

村史編さん委員

綿引 正則

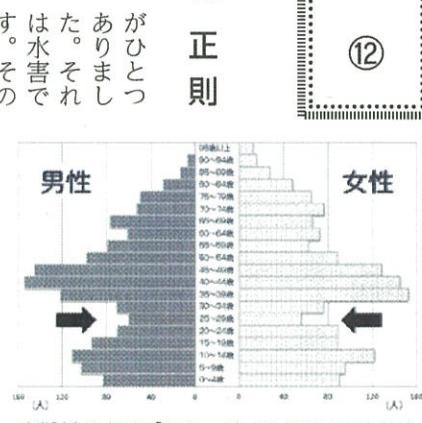
私は平成四年十月末に舟橋村の住民となりました。それから二十三年、舟橋村の村史編纂に係わるという信じられないことをしています。私は、小学校時代から、字がへたくそ、作文が苦手でそのトラウマが今でもあります。そんな人間で、故郷は舟橋ではあります。水戸（茨城県）が私の故郷であります。実際水戸に向かうときのあの何とも言えない高揚感と離れるときの寂しさ感は今もあります。

## どうして舟橋

富山の会社に就職、富山の人をお嫁にもらい、富山に骨を埋める覚悟をしました。娘が生まれ、小学校に上がる前に、富山に家を建てようと思いつきました。しかし、私の稼ぎでは富山市内は無理で、やはり安いのは神通川と常願寺川の外側で、さらに鉄道があるところが生活に便利だろうということになりました。直ぐに村内に適地が見つかりその後はどんどん拍子。娘が小学校に入学する前々年に舟橋村の住民となりました。

## 常願寺川のインパクト

先ほど適地と書きましたが、心配事



舟橋村の人口ピラミッド（平成26年4月1日）

## 人口増を考える

村の人口は現在三、〇〇〇人。人口が短期間で増加したため、住民の年齢構成割合に極端な偏りが生じていることが問題となっています。特に二十～三十代の世代人口の割合が少ないので（図参照）。これはある意味、当然と言えます。小さいがゆえに舟橋村だけでは生活が完結しません。舟橋村はゼロにはならないという思いがありました。しかし、常願寺川の驚くほどの大きな堤防と立山カルデラからの土石流を止める、砂防事業が実施されていることを知り、高コストの土地でありますながら、手ごろな値段だったので購入を決めました。

## 日本一小さな村

舟橋に住み始めて、合併の話をよく耳にすることになります。そして、最終的に合併を選択せず、以前の形のまま残りました。それを可能にしたのは、村史にも記載されていますが、小学校区並みの平坦な土地（従つて、財政負担が小さい）と大規模災害がほとんどなく（国直轄の砂防事業で守られています）、経費のかさむインフラが広域圏で賄われていることから、合併へのインセンティブが非常に小さかったことだと思います。事実、私が見聞きした

合併論議のほとんどは、合併の選択、非選択の損得がよく理解できませんでした。しかし、合併を選択せずの人口増加策は、「日本一小さな村」などの「活気のある村」にもなっていると感じます。このあたりの事情は村史に記載されていますので、是非、ご確認ください。

## そして、故郷

私の故郷は水戸です。舟橋ではありません。しかし、ここで育った子供たちは舟橋が「故郷」のはずです。大学を県外に行く方もいます。就職は、村外がほとんど、県外の方もいますね。外の世界を経験することは、とても貴重なことだと思います。外の経験をたくさんしていただき、舟橋村を改めて感じていただきたい。そのとき、今役に立つのではないかと期待していきます。そうですね、お子さんが小学校回、刊行される「舟橋村史」がたいへん役に立つのではないかと期待していきます。そうですね、お子さんが小学校か中学校に通っている四十代～五十年代の親の世代は、親になつてからで、その構造的な問題で、今後どうするか議論されているところだと思います。

## グローバル化と舟橋村

私は、感染症や食中毒に関連する仕事をしています。この仕事をしていて感じることは、感染症や食中毒には国境はないということです。県境も市町村境もありません。また、東京と富山が新幹線で二時間ちょっとで移動できる時代となり、また海外にも簡単に行ける時代で本当に「境」がない、「ボーダレス」化が一方で急速に進んでいます。そして、すでに多くの舟橋出身の若い人が海外で働いていたり、留学したりしていると聞いています。その上、

編纂委員となつて三年、舟橋村のこの数十年の発展の様子を、様々な資料から見聞させていただき、何とかまとめさせていただきました。ここで最大の心配は、正しく内容を理解して書くことができたかということです。忌憚のないご批判を頂ければ幸いです。

## 村史に携わって

私は、現代史担当。富山県衛生研究所細菌部長。國重在住。

スマホを使って瞬時に連絡が取れるので、すでに「日本一小さな村」は相当グローバル化されていると考えたほうがよさそうです。

# 村史に拾う

(13)

## 「村」社会のしくみ

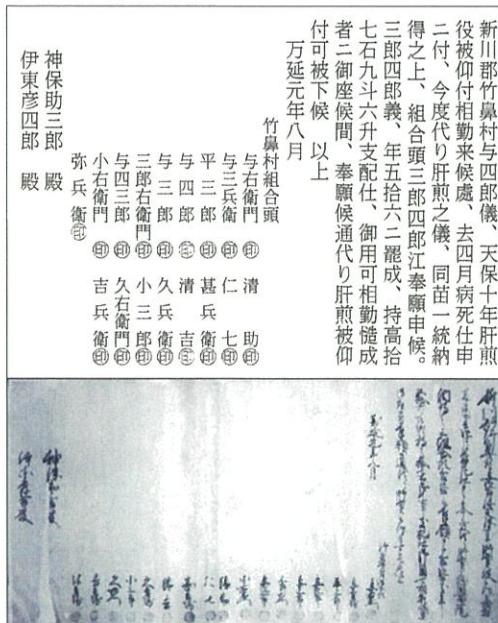
村史編さん委員

宮本 幸江

### ◆ 竹鼻村の「肝煎」

竹鼻の中田文夫さんが「土蔵の中に保管されていた物を整理していたら、古文書が見つかったので見てほしい」と、一

点の古文書を村史編纂室に持参されました。左下の写真はその一部分で、解説するところになります。



肝煎や組合頭は「長百姓」と呼ばれる村内の有力百姓の中から選任されました。後肝煎に推挙された三郎四郎も竹鼻村の石高一五八石の約十一%にあたる約十八石の高持ちでした。

肝煎には役料が支給されましたが、組合頭は原則として無給でした。しかし、天保十二年に「肝煎が他用中で組合頭が代理出張する時は、一日二升の料米を村方から渡すことによ」との触書が出されました。

これは村役人交代に関する文書で、内容を要約すると、「竹鼻村の与四郎は天保十年（一八四〇）より肝煎役を勤めていたが、安政六年（一八五九）四月に病死した。そのため後任の肝煎を組合頭の三郎四郎とすることに村民一同が納得しているので、これを認めてほしい。三郎

四郎は五六歳で持高十七石九斗六升の信用できる人物である」となります。

### ◆ 「肝煎」とは?

この文書から江戸時代の農村社会のしくみを窺い知ることが出来ます。

「肝煎」とは村役人のことで今日の自治会長にあたります。「組合頭」も村役人で肝煎の補佐をします。肝煎は各村に一人ですが、隣村の肝煎を兼務することもありました。享和十八年（一七三三）の記録では、海老江村の肝煎が芦高村を、古海老江村の肝煎は立野・横沢・竹鼻新の各村肝煎を兼ねるとあります。また、組合頭は通常一名ですが、村の規模によっては複数名の場合がありました。

竹鼻村でも三郎四郎と与右衛門の二人が組合頭だったようでした。

肝煎や組合頭は「長百姓」と呼ばれる村内の有力百姓の中から選任されました。後肝煎に推挙された三郎四郎も竹鼻村の石高一五八石の約十一%にあたる約十八石の高持ちでした。

## ◆ 加賀藩農政の要 十村

とむら

はこの十七名に三郎四郎を加えた一八軒の農家があつたことになります。しかし、「同苗一統」というのは本百姓（高持ち）達のことと、村内にはこの他に持高のない「頭振」と呼ばれる農民がいる場合もあります。文化八年（一八一一）の調査では、新川郡の人口の約二〇%が頭振でした。

この文書の宛先は「神保助三郎・伊東彦四郎」となっています。この一人は「十村」と呼ばれる大庄屋で、平均六〇前後の村々が所属する十村組を統括しています。竹鼻村など舟橋地域の村々は江戸時代中期以降「高野組」という十村組に属しており、高野組の十村は代々新堀村属しておらず、高野組の十村は代々新堀村

が他用中で組合頭が代理出張する時は、一日二升の料米を村方から渡すことにせよ」との触書が出されました。

宮本 幸江  
(みやもと ゆきえ)  
元富山県史編さん室嘱託として県史近世編の調査・編集に従事。近世担当。

富山市婦中町在住。

かし十村と十村組の関係は固定的ではなく、十村の転勤や更迭は度々ありました。

安政五年（一八五八）の大震災で高野組は罹災し、竹内村や舟橋村、新堀村も甚大な被害を受けました。その復興期に

あつた万延元年当時、被災した新堀村兵三郎に替えて、高野組十村を神保助三郎と伊東彦四郎の二人体制としたのではなく、いかと考えられます。この文書には、上

中では「同苗一統納得之上」という文言で表現されています。「同苗」とは「同じ苗字の者」と解されます、江戸時代提となりました。そのことは写真の文書中では「同苗一統納得之上」という文言で表されています。「同苗」とは「同じ苗字の者」と解されます、江戸時代提となりました。そのことは写真の文書中では「同苗一統納得之上」という文言で表されています。「同苗」とは「同じ苗字の者」と解されます、江戸時代

を表す言葉と考えられます。その同苗一統が納得している証明として、組合頭與右衛門以下十七名の百姓が名前の下に押印してこの請願書を提出しています。

万延元年（一八六〇）八月の竹鼻村にはこの十七名に三郎四郎を加えた一八軒の農家があつたことになります。しかし、「同苗一統」というのは本百姓（高持ち）達のことと、村内にはこの他に持高のない「頭振」と呼ばれる農民がいる場合もあります。文化八年（一八一一）の調査では、新川郡の人口の約二〇%が頭振でした。

肝煎交代に関わる一連の手続きから、改作奉行（加賀藩の農政担当者）——十村——肝煎（村の代表者）という藩の農民支配の構図が見えてきます。その中にあって、十村は武士と農民をつなぐパイプ役を果たしていましたと言えるでしょう。十村は身分は百姓でありながら、改作奉行のもと農政に携わり、藩から扶持を与える者もいました。一方で十村は村々を廻り、農村の実情を視察して藩に伝える農民の代表者でもありました。このような十村制度は、加賀藩農政の特徴であるとされています。

# 村史に拾う

(14)

百年前に  
村長さんになつたのは?

村史編さん委員 浦田 正吉



野村惟命(明治7年(1874)5月3日～昭和22年(1947)11月12日)

## 「模範村長」をめざして

大正元年～昭和二十年（一九一二～一九四五）は足かけ三十四年間である。

その間、舟橋村長だったのは、五代目明五〇町であつた。農地改革直前には、六五町となっていた（舟橋村で二五町）。仏生寺部落内で二〇町つまり舟橋村内の他部落には五町。舟橋村外に四五町）であつた。ちなみに、昭和初頭、仏生寺の田畠の面積は三一町弱、全舟橋村のそれは二六三町余であつた。

&lt;/

# 村史に拾う

(15)

## 伝説と庶民信仰

村史編さん委員

高谷 純夫

富山県の伝説の特徴

昔話が、話に一定の型（「むかしむかし」などで始まり、「あつたとさ」などの決まり文句で終わる）があるのに対し、伝説や言い伝えは具体的な事物と結びついて、事実として人々に信じられ、語り継がれることにその特徴がある。伝説は荒唐無稽な作り話であるという観点から、歴史学の上では排除されることが多いが、伝説を整理・分析してみると、底流には素朴な心情や庶民信仰が見え隠れしている。

### 富山県の伝説

富山県には多くの伝説が残されている。富山県の伝説をまとめたものには、『越中伝説集』小柴直矩（昭和十一年）四〇九項目、「伝説とやま」北日本放送株式会社（昭和四十六年）

約一〇〇〇項目、「越中の伝説」石崎直義（昭和五十一年）約一七〇項目などがある。

### 水に関する伝説

『日本伝説名彙』（日本放送協会）に収録されている伝説の約半数が水に関する伝説である。水は生活に欠くことのできないものである一方、日本は水害を受けやすく、水に関する伝説は多岐にわたる。特に富山県は「川千本」といわれるほど河川が多く、しかも稻作が盛んであるため、たくさんの伝説が残されている。水の神として描かれている動物は蛇・河童・クモなどが多いが、富山県では「雨乞い伝説」や「大蛇伝説」など蛇が水神として取り上げられている。また、古くから池や川の底などに異郷があると考えられ、「浦島伝説」「枕貸し伝説」などに見られるように、竜宮には竜神や女神などが住んでいて、人間としばしば交流したとされる。「弘法大師（空海）伝説」

のようないいえで、高僧や武将が水を湧き出させたとする伝説も多く残っている。

### 人物に関する伝説

人物に関する伝説も多く残っている。「富山大百科事典」北日本新聞社（平成六年）には、「泰澄」「弘法大師」「西行」「義経」「義仲」「弁慶」「坂田金時」「時頬」「親鸞」「綽如」「蓮如」の伝説が掲載されている。

無量寺（竹内）は親鸞聖人、等通寺（海老江）は蓮如上人との関係から、寺院が創建されたという縁起が残されている。

### 舟橋村の伝説

無量寺の「祠堂經」には必ず雨が降るという伝説がある。

昔、無量寺は八幡川の東岸にあった。その頃無量寺のお婆さんは、「自分が死んだら食べるのだ」と言つて、毎日ご飯を川に流していた。お婆さんが亡くなつて葬式の時、暴風雨になり葬列中にお婆さんを乗せた輿が飛んで川に落ちた。その後無量寺の祠堂經に雨が降るようになったといふ。

※祠堂經…永代經とも言われる。亡き人を偲び、永代まで念仏を伝えていくための法要。祠堂（懇志）は本堂の整備や修復、仏具の購入などに充てられる。

白岩川に住む大蛇（お婆さん）が大雨を降らしてお参りに来るからだという。

高谷 純夫（たかたに すみお）  
元高岡南高校長。等通寺住職。「婦中町史」執筆。神社と寺院を担当。舟橋村在住。



無量寺（竹内）

# 村史に拾う

(16)

## 舟橋村で発見された

### 兵事書類について

村史編さん委員長 須山 盛彰

村史編さんのための資料調査中に、当村の文書庫から多数の兵事書類が発見された。北日本新聞紙上で大きく報じられたので、関心をお持ちの方もあるかと思い、資料の状況について説明する。

#### 兵事書類とはどんな資料か?

兵事書類とは、戦前・戦中の兵事行政に関する公文書のことで、徴兵制度が始まった明治六年(一八七三)から昭和二〇年(一九四五)の太平洋戦争の終戦に至る七二年間に作成された書類である。これらの書類は軍の機密事項があるので、作成や管理は厳密に行われ、村長の監督のもと、村役場内の限られた人員が兵事係(兵事主任)に任じられて主として取り扱っていた。

#### 兵事書類の内容は?

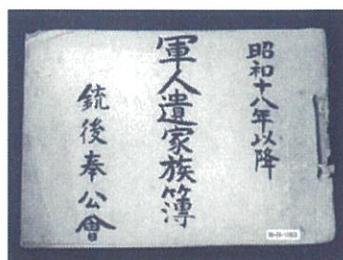
徴兵制度下の日本で国民が軍務に就くのは、徴集・召集・志願の三通りがあった。「徴集」とは徴兵検査に合格した者を現役または補充兵役に編入することで、平時または有事



在郷軍人名簿



動員徵發日誌



軍人遣家族簿

がたてられて  
当人の家を訪  
ねて手渡す。  
不在の場合も  
あり、その時  
はどう処理し  
たかも含めて  
一部始終が記  
されている。

「軍人遣家  
族簿」は、出征軍人全てについて応召年月日、全世帯員の状況、生活状態などが記されていて、軍人を含めた家族全員を援護するための資料になつた。

このほか、志願兵の募集や軍馬の徴発、各種手続きに関するものなど多数にのぼっている。

これらの書類は、ほかの市町村では既に処分されているもので、現実的な効力を持つ(証明などに使用する)ものではない。しかし、「戦時期の資料」としては極めて価値あるものであると考えられる。幸い、当村では一般文書と同様の扱いになつていて、大切に保管し、今後の処置を考えるとよいと思う。

#### 兵事書類は舟橋村文書の一 部、今後の取り扱いは?

兵事書類は多岐にわたるが、なかでも重要なのは「在郷軍人名簿」「動員徵發日誌」「軍人遣家族簿」など兵員の召集に関するものである。「在郷軍人名簿」は、平時は村にて生業に就いているが戦時には隨時召集令状(赤紙)で召集されたが、この召集者を選ぶ台帳に相当するものである。軍隊時代の兵の種類・階級、履歴その他が詳細に記されている。

「動員徵發日誌」は召集令状(赤紙)が軍隊から発せられると、急使を監修。富山市在住。

須山 盛彰 (すやま もりあき)

元富山東高等学校長。元富山県史編さん委員として現代編の調査・執筆に関わる。『新上市町誌』(統下村史)に編入することで、平時または有事

# 村史に拾う

(17)

安政五年

## 飛越大地震による災害

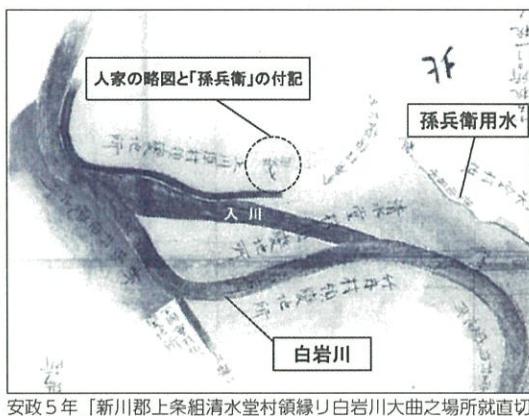
村史編さん委員 宮本 幸江

### ◆ 飛越大地震による災害

安政五年（一八五八年）二月二十六日及び四月二十六日と連続した常願寺川の大洪水は、舟橋地域に甚大な被害をもたらしました。上流から押し寄せた土石流が、利田村領付近（現・立山町）で堰を切り舟橋地域に流れ込んだのです。土石流が残した最大の爪痕は、白岩川周辺の「淀水」でした。震災後の藩による救済措置や人々の努力によって大方の田畠が復旧した後も、この淀水は残されたままでした。白岩川は、舟橋地域に接する辺りでS字に湾曲しており流れが緩やかであるため、田畠を覆う泥水を排出することができませんでした。そこで人々は、屈曲部分を直線化し水流を強くすることで問題の解決を図ろうと考えました。

富山県立図書館蔵の杉木文書の中には白岩川直線化計画に関する絵図があります。ある時、その絵図を眺めていて、気になるものを見つけました。それが右下図の部分です。震災により常願寺川で発生した土

石流が舟橋地域を通過して白岩川に流れ込んだ時、白岩川は竹内村地内で河道を変え（絵図には「入川」と表記）、清水堂村領内に流れ込みました。その新たな川筋の脇の辛うじて流失を免れたかのような位置に、人家の略図と「孫兵衛」の付記がありました。このよ



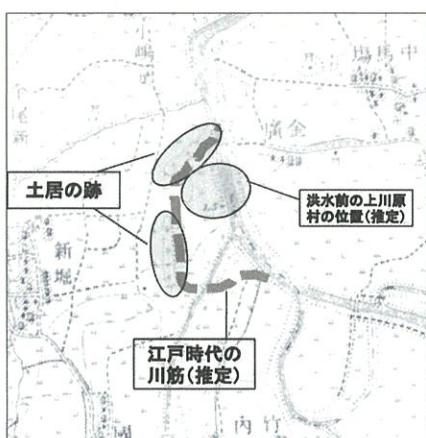
うな絵図に人名が記されるのは珍しいことと思い、孫兵衛とその周辺について調べてみると、

### ◆ 孫兵衛と上川原村

孫兵衛屋敷があつたのは上川原村でした。現在は富山市水橋上川原となっているはずですが、実際には使用されていない地名のようです。しかし、江戸時代にはたしかに存在し、孫兵衛という人物が暮らしていました。

### ◆ 上川原村と白岩川

前記の「村鑑帳」には、上川原村の領域について「東南は清水堂村領境・西は白岩川・北は金広村領境」と記されています。つまり、上川原村は白岩川右岸にあつたわけです。ところが、安政五年の震災によつて田畠に川水が流れ込み新たな川筋が出来たため、上川原村は後に左岸に移ったということです（水橋町郷土史による）。



たのです。それでは、上川原村とはどんな村だったのでしょうか。杉木文書の「文政八年（一八二五）新川郡石割村弥助組村鑑（むらかがみ帳）」によつてその概要を見てみましょう。上川原村は村印高三十九石でしたが、その内九石は延宝七年（一六七九年）に検地引高になつています。おそらく水害による損壊地を検地によって査定し、村高から差し引いたものでしょう。水害が発生しやすい土地柄だったことがうかがえます。村の面積は田畠屋敷地合わせて一町六反五畝（約一万六三六三坪）でした。住民は、文政八年当時、孫兵衛家と頭振（無高の農民）家の二軒に、男五人、女五人という比較的小さな村で、村肝煎は隣村の金広村肝煎が兼務していました。ところが、この小さな村の存在が、江戸時代の白岩川の河道について見直しをきっかけとなりました。

江戸時代の白岩川は舟橋地域東側で大きくS字に屈曲した後、さらに西から北へと湾曲していくのではなくかと推定されます。そうすると、現在の竹内・国重両地区を白岩川が横切っていたことになり、対岸となる部分はおそらく清水堂村領であつたと考えられます。（つづく）

宮本 幸江  
(みやもと ゆきえ)  
元富山県史編さん室嘱託として県史近世編の調査・編集に従事。近世担当。  
富山市婦中町在住。

# 村史に拾う

(18)

安政五年

飛越大地震に拾う

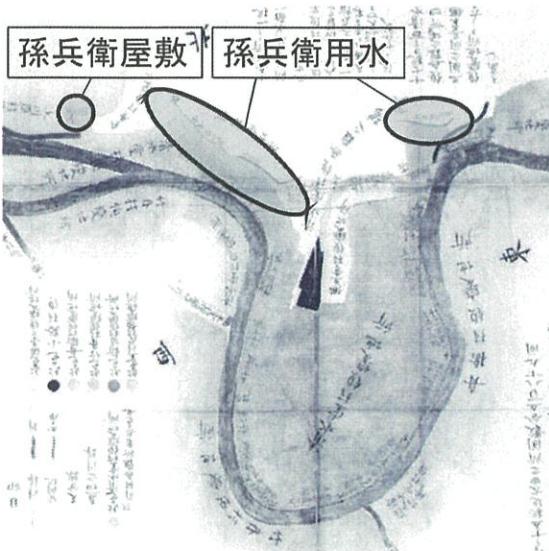
(2)

村史編さん委員 宮本 幸江

## ◆ 孫兵衛と孫兵衛用水

前号では孫兵衛と上川原村、そして白岩川の川筋について考察しました。今回は、その名称から孫兵衛との関連が想像される「孫兵衛用水」に注目してみました。

杉木文書の「文政八年（一八二五）新川郡石割村弥助組村鑑（むらかがみ）帳」には、「上川原村の水田は



## ◆ 孫兵衛用水のその後

孫兵衛用水も、安政五年の震災によつて上川原村の田畠と共に被害にあいました。

しかし、全壊滅したわけではなく、清水堂村以南の部分は水路が残ったようで、孫兵衛屋敷が載つている絵図（上図）にも清水堂村領内を流れる孫兵衛用水が描かれています。そして今日まで、この用水は様々に形を変えて活用されてきました。

清水堂橋の脇に圃場整備竣工記念碑がありますが、その上には孫兵衛用水の記念碑（写真）が載つています。碑面に書かれた内容を

村だけでした。しかも上川原村の百姓は孫兵衛だけ（他の一軒は頭振）だったので、孫兵衛と孫兵衛用水には特別な結びつきを感じます。しかし残念ながらこれまでのところ、その「特別な結びつき」の内容を捉えることはできていません。

行くつては、その存在を知る人も少なくなった孫兵衛用水ですが、この地域の移り変わりをひつそりと見つめながら、今も流れています。



もとに、当用水のその後の変遷の一  
部をたどってみましょう。

明治四十一年（一九〇八）白岩川の改修が行われ、白岩川が清水堂地内を横切ることになりました。清水

堂では水田九町三反が対岸の土地となつたため、孫兵衛用水の水を橋梁に架設した懸樋で対岸へ導き、この土地の灌漑にあてていきましたが、昭和九年（一九三四）白岩川の氾濫により、橋梁・懸樋共に流失してしまいました。これより以前、清水堂地区では孫兵衛用水を補うため、白岩川対岸に新たな用水路を開鑿していました。そこで昭和十年に巨費を投じ、孫兵衛用水の水を全長六十mのサイホンによって白岩川を横断させて対岸に送ることにしました。

以上が石碑に記載されている内容であり、サイホンの完成を記念して建てられたのがこの石碑でした。戦後、上条郷の用排水路が整備され、孫兵衛用水は排水路としてのみ利用

されるようになりました。しかし、サイホンは現在も機能しているとのことです。そして、このサイホンを設置するに至る経緯をたどれば、安政の大地震、白岩川の河川改修とそれに伴う舟橋地区と清水堂地区との間のトラブルといった歴史の一ページが見えてくるのです。今日では、その存在を知る人も少なくなった孫兵衛用水ですが、この地域の移り変わりをひつそりと見つめながら、今も流れています。



「上条用水土地改良区 水門管理マップ」より

宮本 幸江  
(みやもと ゆきえ)  
元富山県史編さん室嘱託として県史  
近世編の調査・編集に従事。近世担当。  
富山市婦中町在住。

# 村史に拾う

(19)

## 日々新たな発見Ⅱ

村史編纂室 林



今も小学校の子ども達を見守る門柱

### 今も残る舟橋尋常小学校校門

私の家から舟橋駅へ歩いて行くと舟橋中学校正門、舟橋小学校正門前を通ります。舟橋小学校正門前を過ぎて校庭を見ると、コンクリート製の門柱が目に入ります。よく見ると、一方には大正8年(1919)10月、もう一方には寄附者の名前が彫つてあります。旧舟橋村誌を読むと大正8年11月に雨天体操場並びに教室一棟が落成したと書いてあります。その際に寄贈されたのだと思われます。現在の小学校校門より道沿いに舟橋駅へ向かって約2メートル進ん

伸夫

小学校の変遷を見守りながら96年間今も建っています。また、現在の小学校校門は昭和12年に小学校が建設された折、帝国在郷軍人分会舟橋村分會より昭和12年4月寄附されたことが、門柱のプレートに刻まれています。当時は、学校敷地の北側中央に設置されており、現校舎新築時に現在地へ据えられたものだとわかりました。これも約40年間気付かなかつたのです。生糸の舟橋村民なのに今まで気付かなかつたのです。これも、村史編纂に携わったおかげだと思います。

涅槃団子

ねはんだんご

涅槃団子作りは、記録がないので確かなことはわかりませんが、大願庵ができた安政年間からだとすると150年以上前から続けられていることになります。そんな信仰心の厚さは、地区の名前にも由来しているのかも知れません。

涅槃団子は、旧暦の2月15日、お釈迦様の命日に行われる法要「涅槃会」で参拝者に配られるお団子のことです。この風習は北陸地方の寺で見られる光景の一つといえます。涅槃団子はお釈迦様の舍利(遺骨)に見えられ、無病息災や交通安全、厄除けなどにご利益があるとされています。涅槃団子にまつわる言い伝えも多くあり、「この団子を多く拾つ



ねはんだんごをする佛生寺地区の皆さん

た人は病気にならない」「三粒腰から下げて山菜採りに行くとマムシに噛まれない」等々あるそうです。団子の色は、お釈迦様の骨が5種類の色に輝いたという言い伝えから来ているらしいですが、仏教でいう五大(地、水、火、風、空)を表し、黒、白、赤、黄、青色の団子を作るという説もあります。一般的には、黒色(茶、紫)を除く4色が多いようです。色々な神様を敬う信仰心の厚い富山县では、涅槃団子を毛糸で編んだ袋に入れて、子どもにお守りとして持たせる風習がありました。最近では、ほとんど目にすることがなくなりましたが、私も小さい頃、母からもらってランドセルに着けていた記憶があります。

### 舟橋村史完成間近

舟橋村史編纂室の事務職員として2年間、編纂委員の方々のお手伝いとの思いでしたが、委員の方々と一緒にいろいろな資料を調べている中で、今まで何気なく思っていた事をより正確に知る機会を得ることが出来ました。

舟橋村史も多くの方々のご協力を得て間もなく完成予定です。舟橋村の歴史を辿ると共に新たな舟橋村を見つけて行きたいと思います。

林 伸夫 (はやし のぶお)

村史編纂室 事務職員  
舟橋村海老江在住

# 村史に拾う

(20)

## 日々新たな発見Ⅲ

村史編纂室 林

伸夫

### 舟運

舟橋村史の参考になるような事が近隣の郷土史に書いてないかと上市、立山町史を読んでいると、「立山町史」に舟運について書かれていました。舟橋村内を流れている川は、白岩川、細川、京坪川、八幡川ですが、特に私の家の前を流れている細川は、竹鼻に船着



竹鼻地区の船着場跡

ありました。早速、現地を見に行き確認したところ、橋の跡が残されておりましたが、残念ながら積み荷の揚げ降ろしに設けられた階段は、川の改修が行われた際に埋め立てられており確認することが出来ませんでした。川の改修前まで確かに階段が設けられていたとの事でした（古田勝利氏談）。となり村なのにそんな場所があったとは全く知りませんでした。舟は二百メートル程の綱で竹鼻まで引き上げられ、船着場で積み荷された後、貯留された水を一気に流して下流の海老江まで舟を運び、ここでも筵や縄などの藁製品を積み込み、佛生寺、舟橋、竹内でも積み荷をして白岩川を下り水橋まで運ばれました。帰りは主に海産肥料を積んできていたようです。細川の名も昔は地元でいろんな呼び方がされていたと思いますが、中世にこの地を支配していた細川曾十郎の名から後に名付けられたのではないかと思います。

一方、八幡川は川幅が約六メートルあり、鉢木、浅生（立山町）まで舟が通航していたとされ、白岩川に合流して米を水橋へ運んでいました。白岩川との合流点にはなまずの

場があり以南の野口、横沢、五郎丸（以上立山町）から馬で運んだ米を長さ約六メートルの長舟に乗せて水橋まで運んでいたとの事です。その船着場跡の写真が掲載されています。

細川では小さい頃、主にフナやなまずを釣つたり、川へ入つてうろと呼ばれる所を魚がないか手で探りながら上流の竹鼻まで行つていました。今と違つて子ども達は、よく川へ入つて遊んでいて、学校から帰つての格好の遊び場の一つとなっていました。

細川は昭和四十年代に改修されるまで、堤防には竹藪、柿、漆、アケビの木などが生い茂り、川幅は現在と同じ位だつたと思ひますが、年に何度もか出水して家の玄関先まで水に浸かりました。特に、下流の佛生寺橋近くはよく溢水していた記憶があります。そんな思い出しかない細川ですが、舟運が盛んな時代があつたのです。

また、京坪川は、細くて蛇行した川で両側には雑木が鬱蒼と生い茂り、カーブや上流のだいや（大家）と呼んでいた所で魚釣りをしていました。この京坪川は川幅も小さく川沿いに集落もないことから、主に農業用排水路として利用されていた川だつたと思います。

このように、近隣の町史からも舟橋村の新しい発見をすることが出来ました。六十代の私の限られた思い出しかありませんが、各地区の集まりなどで諸先輩方から川との関りを聞いていただければ、きっと新たな発見が出来ると思います。そのきっかけとなれば幸いです。

林 伸夫（はやし のぶお）  
編纂室 事務職員  
舟橋村海老江在住

# 村史に拾う

(21)

## 新版『舟橋村史』のあらまし

### —近日刊行の予定—

村史編さん委員長 須山 盛彰

#### 一、新しい村史の刊行

平成二十四年四月にスタートした新しい村史の編さんは、ようやく最終段階を迎えています。二十八年二月、原稿の取りまとめを終え、印刷製本の上、新年度には発刊の予定となりました。どんな内容になつておるのか、そのあらましを紹介しておきましょう。

#### 二、出版の趣旨

本書の出版の目的などは、次のようにあります。

前回の村史、「舟橋村誌」第二編が昭和三八年に刊行されてからすでに五〇年が経過し、その間、村が大きく変貌し、歴史研究も大いに進展しました。これらのことを受け、富山県内で唯一の村、舟橋村を核とし、さかのばつて先史・古代から現代にいたるまでの総合的な歴史を編むものとして書名を「舟橋村史」として刊行することになりました。

#### 三、全体構成および主な内容

本書の構成は、村誕生以前の第一編「舟橋地域史」と村誕生以後の第二編

二編「舟橋村史」とに大きく分けて記述し、それに第三編「民俗・宗教」および第四編「集落史」を加えることにしました。現在出されている原稿を通読して、各編各章の特徴的な部分をかいづらんで紹介してみましよう。

#### 第一編 舟橋地域史

序章（自然）では、舟橋村域の特色である常願寺川扇状地の地形・地質を中心に記載しています。

第一章（先史・古代）では、舟橋村域の狩猟採集時代から古代莊園制の始まりまで記述していますが、中でも竹内集落にある天神堂古墳を白岩川流域の最初の古墳として詳しく述べています。また、東大寺領大藪莊が舟橋村と立山町の境界地域に比定されることが紹介されています。

二章（中世）では、白岩川流域での莊園の成立に始まり、高野本郷が足利將軍家の御料所だったことや細川氏の仏生寺城の遺構について記述されています。また、真宗門徒が形成されていった足跡や一向一揆とのかわりについても触っています。

三章（近世）では、「加賀藩政のもとで」「村と百姓」「変わりゆく村の暮らし」のタイトルで、史料に基づき江戸時代の村々の様子を具体的に記述しています。例えば、加賀藩独特的の十村の仕組みが舟橋地域ではどのようにになつていたかを、藩から下された「村御印」などにより、分

かりやすく説明しています。

#### 第二編 舟橋村史

第一章（明治期の舟橋村） 村誕生以前では、「明治維新とばんどり騒動」が特筆されています。特にばん

どり騒動が起きた要因と、騒動の経緯を詳細に記述しています。

村の誕生については、どうして舟橋が誕生したかを考え、それ以降の明治期では、農業および勧業政策、舟橋村の副業や諸商売、出稼ぎなどについても、新聞記事など多様な資料から興味深く記載しています。

第二章（大正・昭和戦前期）では、「舟橋政の展開」「諸産業の展開」「交通・通信、その他、生活の利便性の向上」などの項目を設けて、役場資料などに基づき具体的に記述しています。また、役場資料の中の兵事書類から大正・昭和戦前期の徵兵制度の実態を明らかにしている部分は本村独特の内容です。

第三章（戦時下の舟橋村）では、戦時下の切迫した状況を役場文書資料により記述。終戦を挟んで次章（四章）の内容と連続する形で記述しているのが本書の特色の一つです。

第四章（戦後民主化期の舟橋村）では、急速な民主化の状況を村行政の改革や農地改革、新制中学校の設立に見ることができます。

第五章（高度成長期とそれ以後）の記述で特色あるものとしては、次のことがらをあげることができます。

○町村合併をしなかつた村（昭和と平成の大合併）

○建国祭を行つた村  
○富山・高岡都市計画区域の指定

除外を達成した村  
○住宅地化政策を実現し、人口を倍増した村

○一村一小学校・一中学校の村  
これらの歴史的事象について、原因や影響を記述しました。

六章（舟橋村のいま・未来）現在の人口統計から舟橋村の未来計画<sup>II</sup>。舟橋村総合戦略が導かれています。

また、二十一世紀生まれの最初の学年である中学三年生の夢と村に対する思いを語ってもらいました。

#### 第三編 民俗・宗教

第一章（舟橋村民の暮らし）では、明治期以降、平成期までの時期ごとに、暮らしや風習がどのように変化しましたかを舟橋村に視点を置いて記述しました。

第二章（神社と寺院）では、役場文書中に明治九年調査の「神社明細帳」の原本が発見されましたので、写真で紹介しました。また、寺院の項目では地域につたわる「連々講ご消息」に関する資料が掲載されました。

#### 第四編 集落史

舟橋村の集落の特徴および明治以降の変化を概観した上で、自治会のある12の集落（自治会）について、集落の概観、集落の歴史、自治会活動について記述しました。

また平成二十六年十月の空中写真に施設等を記して掲載しました。

「村史に拾う」をお読みいただけありがとうございます。ありがとうございました。これまで本シリーズは終了とさせていた